

洛友会会報

京都大学電気系専攻内
洛友会
〒615-8510
京都市西京区京都大学桂
075-383-7014
www.rakuyukai.org

読書で力をつけよう



洛友会会長 長尾 真 (昭34年卒)



新年明けましておめでとうござい
ます。洛友会の皆様におかれま
しては、今年も良い年をお過しに
なりますようお祈り申し上げます。

さて、昨年はいろいろと暗いニ
ユースが多かった中で、ノーベル
物理学賞に京都大学名誉教授の益
川敏英先生が選ばれたのは久しぶ
りの明るい、またすばらしい事
件でありました。事件“といひ
ますのは、ふつうは国際的に高く
評価される研究成果をあげている
研究者は外国にしばしば行き、多

くの友人を外国にも持っているとい
うのが常識ですが、益川先生の
場合には外国に1回も行ったこと
がないという、全く考えられない
行動の人だったからです。

そこでよく考えてみますと、ア
メリカのノーベル賞受賞者でヨー
ロッパや日本に行った/来たこと
のない人は、これまでにくつと1
人や2人いたのではなかつたとい
うこと。ほんとうにすぐれた研究
はどこにいても出来るということ
を示した良い例ということが出来
るでしょう。

日本の研究はこれまで世界のト
ップを行くものを数多く出しては
来ましたが、一般的にいうと、ア
メリカ追従型といえますか、ある
いはアメリカに対して少々の劣等
感を持っていて、日本国内での成
果の上に立って次を考えると、か
日本の他の研究者の成果を十分に
評価するということをしてこなか
ったように感じられます。しかし

益川先生の例だけでなく、自分の
考え方を貫いて研究をして来た人
の成果は世界でよく評価されると
いうことが最近では徐々に出来て
おり、そのような研究態度の正
しさが広く分つて来たのではない
かと思われます。これは概念的に
分つているというのでは不十分
で、それぞれの研究者の身につ
いたものとして分つていなければ
ならないわけです。

今日では外国へ行つて研究した
り、成果発表をしたり、外国人と
付き合うのは日常茶飯な時代にな
つて来ましたが、日本である
か外国であるとかの区別を意識せ
ずにやれるわけで、結局自分がい
かに自信をもつて自分に深く沈潜
し、考えるかということにつきる
わけであります。そのためには現
代はあまりにもやかまし過ぎ、忙
しすぎ、静かな時間を持つことが
難しく、これは何とか変えていか
ねばなりません。

こういったことは企業活動につ
いても言えるわけで、小さな社会
でもそのユニークな技術によつて
世界に広くマーケットを持つてい
るというところがいろいろある
わけですから。これはまた日本とい
国についても言えることではない
でしょうか。日本には非常に高度
な技術をもつ伝統工芸がありま
すし、絵画や舞台芸術、茶道・華道
はもとより、源氏物語をはじめと
する多くの世界的な文学もありま
す。また、道元の仏教哲学などは
非常にユニークで深い内容を持
つたものであります。こういったこ
とを今後の日本、あるいは世界の
ために生かすのは我々の責任であ

るわけです。
何でも世界一を目指すというの
も悪くはありませんが、国民全体
が精神的にも、肉体的にも健全で、
ゆつたりした生活、お互いに調和
し平和的に生きることでできる
”豊かな”社会を実現するというこ
とに目標をおいて、自分の身の丈
を考えた活動をする日本というも
のを目指すことの方がもっと大切
ではないでしょうか。

地球環境問題、エネルギー問題
等深刻な問題がある中で、日本の
人口が減つて行くことについての
大きな懸念がありますが、私はむ
しろ30年、50年先に人口が800
0万人くらいになつても健全に活
動している日本というものの設
計を今考えるべきではないかと思
つています。けつして背伸びせず、
世界のトップではないが、他国か
らうらやまれるような国というわ
けです。デンマークやスウェーデ
ンなどはその範となる国ではない
かと思われます。

さて、国立国会図書館長という
立場にいますと、いろんな方々と
お会いします。国会議員もそうで
すが、出版界の方々ともよく話を
する機会があります。今日はあら
ゆる企業が困難な状況にありま
すが、出版界は特に構造的な不況に
あるといつてよいでしょう。
若い人々は、新聞を読まなくな
つているといひます。昔とくらべ
て、たとえば京大周辺の新聞の売
れゆきは全く減つてしまつてい
るといひますし、多くの新聞社は赤
字になりかけるといひ深刻な状況
と聞いています。多くの人はイン
ターネット上の電子新聞を携帯電

迎春

二〇〇九年一月一日

本 部 役 員

名誉会長 近藤 文治
会 長 長尾 真
副会長 松本 慎二

支 部 長

石川 順三
市原 達朗

本 部 幹 事

木村 磐根
神戸 俊夫
大澤 靖治
吉田 進
佐藤 亨

関 西 北 井 茂
東 京 間 宮 馨
中 部 根 石 行
中 国 細 田 順 弘
四 国 四 宮 幸 生
九 州 深 堀 慶 憲
北 陸 松 木 純 也
東 北 井 上 茂
北 海 道 中 山 道 夫

話で読んでますますといったことや、国民の政治への関心が減って来ていることや、テレビのニュースも殺人や詐欺など陰鬱な事件ばかりですし、他の番組もそれほど魅力のあるものがないといったことで、これからのメディアのあり方が問われているわけです。

同様のことが出版界でも起っていて、年間に8万点という出版があるにもかかわらず、出版界全体での売り上げがピーク時の25兆円から2兆円程度まで下って来ているということですが、まだまだ下っていく可能性があり、大都市の中心部に大型の書店が出る一方で、地方の小さな書店がつぶれて行っているともいいます。これに拍車をかけているのが携帯文化でしょう。電車の中でも本を読んでいる人はごく少数なのに対して、ほとんどの人は携帯電話で何かしているというわけです。

子ども達の読書はなれば将来の日本にとって大きな問題であるということから、昨年国会において2010年を国民読書年と定めて読書のすすめを国として行うことを決めました。どのようなキャンペーン行事を行うかはこれから立案していくことになるわけですが、図書館界においても大いに読書をすすめる活動をするべく検討中であり、洛友会の皆様方におかれましては今年、来年とより一層の読書に心がけていただければと存じます。

経済のどん底の年こそ、静かに耐えて実力を蓄える年でありたいものです。

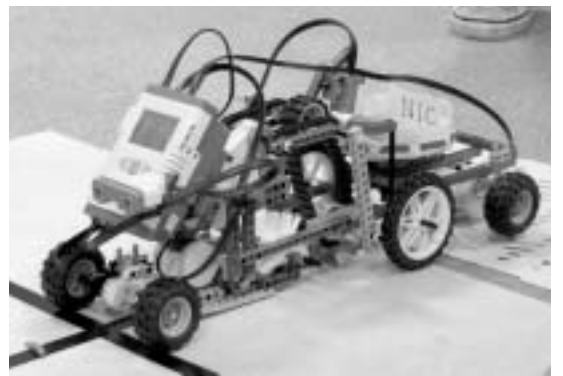
教室だより

電気電子サマーキャンプ 報告

電気電子工学科では、最近の学生に工作体験が乏しいことを考慮し、本年度より夏休みの課外活動を支援する試みを開始した。これは同時に、本年度よりスタートした洛友会の学生会員制度における本会事業としての側面を持つ。初回となる本年度は、1回生を対象に、KESC (KUEE Electronics Summer Camp) と題して、北野教授、須田准教授の指導のもとで、前期試験期間が終了した7月30日から8月1日までの3日間に開催した。

キャンプと言っても実際に宿泊するわけではなく、少人数教育用途に確保したA号館の3部屋を利用し、学生グループに解放してロボット製作とコンテストを行った。設備は、昨年度に文部科学省の理数学学生応援プロジェクト「グローバルリーダーシッププログラム」の経費で整備したレゴ社のロボット製作キット「Mindstorms」10セットとPCを利用した。単位などは付与しない課外活動であるにもかかわらず学生の関心は高く、女子学生4名を含む23人が申込み、8チームを構成した。

このキットは、レゴの特徴である自由な形状を作れることに加え、制御装置と数種類のセンサー、アクチュエータパーツを備え、PC画面上でブロックを組み合わせて



る要領で簡単にプログラムを組み立てることができるなど、ロボット工作におけるハードルを極力低くし、アイデアの実現に集中できるように配慮されている。このため世界中の小中学校から大学にわたる教育機関でさまざまな試みに利用されている。

本キャンプでは、京大機械研究会(ロボコンなどに参加するサークル)の経験者を中心とする6名の大学院修士課程のTAが、課題設定から学生へのガイダンス、製作指導などに奔走し、行き届いたアドバイスを与えてくれた。実質わずか2日間で、8チームがそれぞれに異なるアイデアでロボットを製作し、いずれもそれなりの性能を発揮するレベルに達したことは驚きに値する。今回の課題は、1列に並べた「柿ピー」の柿とピーナッツを選り分ける、というユニークなもので、これもTAの発案による。出されたアイデアは、



柿とピーナッツの高さの違いを台上から押しで識別するものや、回転台に載せて遠心力で分離しようとするものまで、教員の想像を超えるバラエティに富んだものであった。コンテストでは、20個の柿ピーを識別する2回のトライで40点中39点という好成绩を取ったチームが優勝した(写真は製作されたロボットのひとつ、表彰式の記念写真)。優秀チームには表彰状と、副賞として洛友会より図書券を贈呈した。

実施後のアンケートでも学生の反応はたいへんよく、これに続く企画を求める声が多かった。学科の企画・広報委員会で検討し、来

迎春

二〇〇九年一月一日

京都大学

電気関係教室

教員一同

パナソニック 〰

高周波熱錬 〰

代表取締役社長 山下 英治

〰 S C C

代表取締役社長 松尾 泰

宇宙技術開発 〰

代表取締役社長 松尾 泰

年度は新たに2回生向けに、PSoC (Programmable System-on-Chip) と呼ばれる1チップマイクロンを用いた工作教室を開催することにしました。再来年度には3回生向けにアドバンスコースを設けることも計画しており、研究室配属までの3年間にものを作る楽しさを経験させることで研究への動機づけを高めるプログラムとする予定である。

電気系教室懇話会報告

平成20年度の懇話会は、11月14日(金)に吉田キャンパスにおいて開催されました。第一部の講演会は、川上電子工学専攻長の司会で、14時から17時30分まで電気総合館大講義室にて行いました。講演会には名誉教授の木村磐根先生、西川禎一先生、深尾昌一郎先生にお越し頂き、参加者は卒業生も含めて約120名でした。

学科長挨拶に続いて最初に、松波弘之先生(昭和37年卒、京都大学名誉教授、科学技術振興機構JSTイノベーションプラザ京都館長)に「パワー半導体SiCにか



る夢」という題でご講演を賜りました。新しい産業を育成するという科学技術振興機構における現在のお仕事のご紹介の後、ご研究の半生を振り返る貴重なお話を伺うことができました。さらに、電気エネルギー利用の際の電力変換に用いられているシリコンデバイスが物性限界にあり、これを桁違いに越えるSiCパワーデバイスの実用化近づいており、エネルギーの有効利用、ひいては、環境負荷低減に有用であることなど、将来に夢を託す技術として発展している現状を解説いただきました。企業への就職を考えておられたのが、急遽大学に残られることになり、研究室の半導体研究をテーマ設定から予算獲得に至るまで一任されて、とまどいながらもスタートされたことなど、新しい分野の開拓者ならではのご苦労が偲ばれるお話がありました。その後、ライフワークとなったSiCの研究においても、最初に目指されたのは青色発光素子であったことや、獲得された予算の制約上、高温特性のみが表に出たりしたことなど、多くの紆余曲折があったことをご紹介頂きました。特に、学生の失敗から生まれた、傾いた面方位基板への均質結晶成長法のお話は「偶然は、準備された精神にしかほほえまない」の言葉通りと感銘を受けました。

続いて、宮本順一様(昭和48年卒、東芝メモリシステムズ常務取締役)より「開発サイドから観るフラッシュメモリビジネス」という題でご講演頂きました。宮本様ご自身は「松波先生のお話には全く出てこなかったお金の話ばかり」と謙遜して前置きされましたが、熾烈な価格競争を支えた豊富なアイデアと極めて多くの分野にまたがる徹底した技術開発など、世界市場で競争力を誇る東芝の技術の真髄を見せて頂いた想いです。HDDを固体メモリSSDで置き換えることを目指して、NAND型フラッシュメモリの開発を決断されたばかりの1988年にGMR効果(2007年ノーベル物理学賞)が発見され、HDDの価格が急落を始めて思惑が狂ったこと、逆にデジカメや携帯電話の高機能化など思わぬ追い風があったことなど、市場に直結する製品開発の難しさを痛感するお話でした。また、最大のライバルであった三星との提携など、企業の経営戦略についてもその舞台裏を垣間見させて頂きました。



最後に、福永泰様(昭和48年卒、日立製作所技師長)より「知的創造社会実現を目指したuVAlUE活動―実業とITの融合を求めて―」という題でご講演頂きました。現在中心的に関わっているuVAlUE活動は、「実業×IT」をキーワードに、価値を顧客と協創することを目指す活動とのことで、その実際についてさまざまな実例に即してご紹介頂きました。発電所の原子炉制御では、60年間の寿命を維持するため、制御系や配管などを常に更新し続ける必要があります。RFID「マイクロチップ」をすべての結線に取り付けて管理を行うなど、IT技術がいかに実業に利用されているかをご説明頂きました。鉄道に関しては「緑の窓口」のオンラインシステム開発について、国鉄職員が日立に出自し、机を並べて開発された当時の貴重な歴史を伺い、大規模システム開発の核は人間関係にあることを改めて感じました。最近の事例では、名札型のセンサーネットを活用しコミュニケーションを可視化する「ビジネス顕微鏡」のお話など、IT技術のこれからのお話を示して頂きました。なお、研究所のサーバーとつないで、リアルタイムの音声合成で講演頂くことをご準備頂きながら、講義室の通信環境不備で実現できなかったことを改めてお詫び致します。



迎
春
二〇〇九年一月一日

電子開発学園
北海道情報大学
理事長 松尾 泰

電気評論社
財団法人
近畿地方発明センター
理事長 近藤 文治

応用科学研究所
財団法人

田中プリント
株式会社

第二部の懇親会は、吉田南キャンパス(旧教養部)の吉田食堂1階に移動し、萩原電気工学専攻長の司会により18時から19時半まで行いました。参加者は、学生実験終了後参加した教員・学生を加えて約140名と盛況でした。木村磐根先生(昭和30年卒、名誉教授、洛友会代表幹事)のご挨拶と乾杯のご発声に続き、3名のご講演者やご参加頂いた名誉教授、OBの方々と教職員、学生の間で大いに議論が盛り上がりしました。

最後になりましたが、たいへんご多忙なスケジュールの中、ご講演を快くお引き受けいただいた講師の先生方をはじめ、遠方よりご参加下さった卒業生の皆様、ご参加頂いた教職員、院生・学部生の皆様に厚く御礼申し上げます。また、共催頂いた洛友会には、経費支援の他、名誉教授の先生・卒業生の皆様へのご連絡等多大なサポートをいただきました。これから卒業生と教室の交流の機会として懇話会を利用していただければ幸いです。

会員寄稿

スポーツとしての自転車

岡崎 徹

(昭60年卒・関西支部)

ここ数年でスポーツとしての自転車に乗る人が増えました。寒くなりめっきり減ってはきていますが、ちよつと山奥にドライブに行っても、自転車に乗っている人を

見かけます。何を好き好んで、とお思いの方も多いと思いますので、ちよつとその紹介をしたいと思えます。

自転車には、日頃経験できない、とことんまで体を使い切る快感があります。峠を、さほど気合いを入れずに登っても楽しくありません。気合いを入れ、せえせえ言いながら登り、頂上で道ばたにへたり込む。夏なら水筒から水をかぶる、生ぬるい水が甘露水になる。この瞬間の何物にも代え難い充実感、開放感。自転車の初心者と上級者ではタイムこそ違え、この感覚を味わうには関係無い、だれにでも到達出来る至福の瞬間です。車やバイクでは、その性能をフルに使い切る事はまずできませんが、自転車ではエンジンll自分の体をフルに使い切る快感があります。マラソンをされるかたのランナーズハイと同じ物と思います。が、両方する人によると、自転車の方が楽しいとか。

友人達と車列を組み、遠出するのも楽しいものです。脚力の揃ったメンバーなら1日で200kmは楽に移動できます。話では24時間で東京大阪を走破する強者も居るそう。遠出の時は、その行く先々で食べる物のおいしいこと。特にグルメな店に入るわけではありませんが。自転車はそこそこ慣れてくるとエネルギー消費がどんどん大きくなるため、兎に角お腹がすくのです。空腹に勝るレシビ無し、です。逆に、自転車を訪れて「絶品!」と思つたところに家族で行つたら、それほどでもなかつたりして非難を浴びるといふ副作用も

◎退職記念行事のご案内

石川順三教授、橘邦英教授、近藤克己教授、富田眞治教授 におかれましては、来る平成21年3月31日付で定年を迎えられることになりました。左記の通り、各先生の最終講義ならびに記念行事を開催することになりましたので、ご案内申し上げます。

石川順三教授 最終講義のご案内

日時：平成21年3月16日(月) 午後1時30分
より(予定)
場所：京都大学桂キャンパス 船井哲良記念講義室
題目：「荷電粒子ビーム源とビーム新応用」
連絡先：後藤康仁准教授
Tel：075・383・2279
email：ygotoh@kuee.kyoto-u.ac.jp

石川順三教授 退任記念パーティのご案内

石川順三教授の退任記念パーティは平成21年5月17日(日)、ウエスティン都ホテル京都で開催予定です。お問い合わせは、最終講義と同じ連絡先までお願い致します。

橘邦英教授 最終講義のご案内

日時：平成21年3月16日(月) 午後3時30分
より(予定)
場所：京都大学桂キャンパス 船井哲良記念講義室
題目：「自分なりの応用物理を楽しんで40年」
連絡先：酒井道准教授
Tel：075・383・2289
email：taikan@plasma.kuee.kyoto-u.ac.jp

橘邦英教授 退任記念パーティのご案内

橘邦英教授の退任記念パーティは平成21年5月30日(土)、京都大学桂キャンパス 船井哲良記念講義室で開催予定です。お問い合わせは、最終講義と同じ連絡先までお願い致します。

近藤克己教授 最終講義のご案内

日時：平成21年3月17日(火) 午後1時30分
より午後3時00分
場所：京都大学吉田キャンパス 工学部物理系校舎315号室
題目：「光り輝くプラズマを見つめて」
連絡先：岸本泰明(エネルギー科学研究科教授)
Tel：0774・38・4430
email：kishimoto@energy.kyoto-u.ac.jp

近藤克己教授の退任記念パーティは未定です。

富田眞治教授 最終講義のご案内

日時：平成21年3月13日(金) 午後3時00分
より午後5時00分
場所：京都大学吉田キャンパス 工学部8号館3階 大会議室
題目：「私のコンピュータアーキテクチャ教育研究の36年―マイクロプロセッサの歴史と歩みを共にして―」
主催：京都大学大学院情報科学研究科通信情報システム専攻
連絡先：中島志保秘書
Tel：075・753・5973
email：shiho@kuis.kyoto-u.ac.jp

富田眞治教授の退任記念パーティは未定です。

あります。

工学的には（とは、大層な）、自転車を始めてからチューニングの重要性が身をもって感じるようになりまし。極めて限られた体力を出し切って移動しますの、ひたすらに高効率ポイントを探さないで遅れをとります。これには色々な面での調整が必用で、タイヤの幅、ホイールの種類、潤滑油、ギアの歯数、サドルの高さ、姿勢、脚の回転数、着る物、食べた物、体調、などなど、機械的な事から体の事まで全てを高度にバランスさせた場合と、少しでもバランスの崩れた場合とで明らかな差が出てきます。自転車によつては30段変速、とかありますが、これはその最適点を見いだすための一つの手段です。

機材に關しても、うんちくを語り、愛でる余地があるのも、面白いところ。剛性を保ちつつひたすらに軽量化したパーツ類は、それぞれに最新・最先端の材料が使われて、それらを一つ一つ吟味し、自転車をくみ上げる事は、何の資格も無しに出来ます。それに所詮は自転車ですから、世界最高性能の機材、エンジン以外、を揃えることもさほど財布を傷めずに出来ます。私のは世界最高レベルにほど遠いのですが、それでも色々いじって楽しんでます。ある時、家内にチェーンの特殊なひとこまが500円した、と言つたらひたすらにあきれられました。それ以来、家内からは警戒されていますが、こちらも値段の事は減多なことでは言わないようにしています。たまに自転車を指さ

されて「これはいくら？」と聞かれても、まさにその指が指している部分だけの値段は答えます。嘘はいけません。一方、洛友会メンバーはやはり目が肥えています。先日、関西支部遠足の下見は、僕は自転車で行きました。狭い京都ではよるず機動力を発揮するためには便利だから、という言い訳。そのとき、ホイールを指して「切削加工までしてるやん！（そりゃ、高いわ）」と言った人も居ました。ちなみに、そのホイールはグラムあたり1000円、銀より高い。でもグラムあたりはブランド物のハンドバッグよりは安いから、いいですよ。この夏には、吉野グランフォンド、というイベントに参加しました。これはグランフォンドというイベントはレースではなく、設定時間内に完走出るかどうか、というイベントで、結構あちこちで行われています。コースは、160kmコース。残念なことに、私は途中20分遅れで足切りされてしまい、少し短いコースに回されてしまいました。猛暑のためか、完走率は半分程度と例年になく厳しい状態だったので、まあしゃあないな、と諦めようとしていますが、やはり悔しい。この長く苦しい1日の中、完走の事以外考えずに過ごしましたが、こんなに一つのこと集中したのは久しぶりです（こちら、仕事は！）。また、わくわくどきどきして前夜寝たのも忘れられませんが、大人になっても、まだまだ冒険気分って味わるるもんです。

スポーツです。リタイアされてから始め、私より遙かに速い方も幾人か知っています。基本的には時間さえかければ、運動神経に關係なく速くなるのですが、勤め人ではなかなかそうはいきません。さらに、子供らが居る間はそつちの面倒みないと、思っているから。なので、遅い。いえ、言い訳です。

弓との付き合い

山地 教文
(平11年卒・四国支部)

「趣味は？」と聞かれると、「弓道かな。」と私は答える。すると、「話し相手は「えっ、きゅうどろ？」と不意をつかれたような反応をして、必ずと言っているほど「弓道って」と言いがら、弓を引く真似をする。「弓道」という言葉を会話に出した時、こんなやりとりをすることが多い。

私が弓道を開始したのは高校の時、弓道と関わるようになって、かれこれ18年が経つ。とは言いつつ、就職してからは、1年のうち1回しか弓を引かなかった年もあり、まじめに練習していたのは、18年のうち実質半分にも満たないくらいか。

大学に在学中は体育会弓道部に所属していた。弓道場は薬学部の西側、川端近衛の南東側敷地内にある。射場は最大12人同時に弓を引ける広さがあり、大きめの弓道場だった。また、弓道場内の四畳半の部屋には、コタツやテレビ、ビデオがあつて、そこで休憩をし

たり、ビデオに撮つた自分の射形のチェックをしたりした。この部屋は狭かつたが、時には部員同士が弓道について熱く語り合う場所となり、そして時には飲み会の場所となるなど非常に使い勝手のよい部屋であつた。

弓道場には布団も完備されており、飲み会で酔いつぶれて朝を迎えたことも幾度かあつた。さすがに、朝目覚めた時、二日酔いで、体中が落書きだらけ（しかも油性マジック）、おまけに頭がカピカピになつているのに気づいた時は、なんとも言いようもないむなし気持ちになつたものだ。それも今となつてはよい思い出である。

24時間いつでも練習できる環境であつたこともあり、講義が終わると弓道場に行つて練習をし、夕食を食べてまた練習をするという毎日であつた。日付が変わつても練習していたこともあつた。おかげで、主将を経験させてもらい、関西1部リーグで私立大学の強豪校を相手にまずまずの成績を残すこともでき、幸せな弓道部生活が過ぎることができた。今思えば、これまでの18年間の弓道経験の中で、在学中の4年間の一番弓道のことを考え、弓道のことでの悩み、喜び、泣いた時であつた。

こんな暑い時間をともに過ごした弓道場は一昨年にお役御免となり、今は同じ敷地内に新しい弓道場が建てられている。その年の夏に久しぶりに京都へ行った時に新しい道場を訪ねてみたが、立派な道場だった。自分達が過ごした弓道場が取り壊されると聞いた時

は、弓道部の一つの時代が終わつたように感じ、少し寂しい思いがあつた。さらに、新しい道場で顔も名前も知らない現役部員が練習しているのを見ると、自分達がいた弓道部とは全く別のもののように感じ、さらに寂しい思いが深まつた。しかし、数多くの先輩方から受け継がれてきたものが、途中で少しずつ変化をしながらも彼らに受け継がれ、その過程に自分も関わっていたことを考えると、弓道部を取り巻く環境が変わつただけだと思えるようになり、寂しい思いも薄れてきた。そして、自分達と同じように彼等の手によつて弓道部の歴史が積み上げられているのだと思つた。今は、自分が弓道部にいた時の思い出を重ねながら、彼らの活躍を祈つている。さて、社会人になつてからの弓道との関わりはというと、仕事の関係上、学生時代のように練習時間を作ることは難しく、冒頭でも書いた通りあまり練習していない。当然、下手くそになつて、成績はガタ落ちで、弓を引くモチベーションは上がらなかった。幸い、会社の弓道部に所属し、最低でも年1回の射会に参加すること、弓道との関わりを完全に断つことなく、細々とではあるが続けられた。

そうこうしているうちに最近では、下手くそでも、成績が悪くても、たまに練習に行つて弓を引くことを楽しむことができるようになってきた。弓を引く目的が、試合で結果を出すことから純粹に弓道を楽しむことに変わったのだと思う。また、弓道を通して人付き

合いが増え、これもまた弓を引く楽しみとなった。こうして、練習に行くペースも上がり、最近では最低でも月に1回は練習するようになった。もう少し練習に行きたいが、まあでも、この分だとこれから先、弓が引けなくなるまでは弓との付き合いが続くことになりそう。そう考えると、「趣味は弓道」だとはつきり言える。でも、やっぱり試合では結果を出したいなあ。

環境に優しい家作り

(その1)

菌田 徹弥

(昭51年卒・九州支部)



三十二年にわたるサラリーマン転勤族の生活の中で、常に夢に描いていた木造無垢の終の棲家を実現しました。基本設計着手から完成まで一年半。五十路を過ぎて、最後の体力を振り絞ったのが家でした。家作りにあたってのテーマは環境との共生。自然素材、自

然エネルギーを日々の暮らしに生かす住み方を目指しました。施工は熊本のある工務店にお願いしましたが、その会社もロハス(Lifestyles Of Health And Sustainability) 健康と持続可能性を目指すライフスタイル)な暮らしを提唱していましたし、その工務店さんの福岡進出とタイミンが一致し、いろいろな面で先進的なものを取り入れたモデルハウスとして仕上がりました。これまでも多くのお客様にお越し頂いて、木造無垢の家の香り、アイデア満載の機能的な作りを体験して頂いています。

家作りにあたっての基本は、経済性、デザイン性、機能性のバランス感覚と納得感だと思います。自分の懐具合を勘案しながらおしやれで住み易い機能的な家作りを目指す。人任せにしない、自分の目で確かめ納得するまで議論し行動する。終の棲家作りは一生に一度あるかないかの一大事業です。プロセスを徹底することで、満足感のある夢が実現するものと思えます。

今後、何回かに分けて、我が家の特徴的な事項について述べていきたいと思えます。

太陽熱の利用

吹抜けのリビングルームを持つことも夢に描いていました。しかし、吹抜けは冬の寒さ対策が問題で一般的に寒くて使いづらいとはよく聞いていました。そのため、OMソーラーシステムと呼ばれる太陽熱を利用した全館暖房システムを採用しました。これは、冬は冬らしく、夏は夏らしく過ごさな

がら、ほどほどの温かさ、涼しさを得ようというシステムです。冬に薄着でいられるような温度を得るといふ暖房ではありませんし、夏に体が冷えてしまうような低い温度を求めるものでもありません。

冬は屋根に降り注ぐ太陽の熱で空気を温めそれを床下に送り、基礎コンクリートに熱を蓄えます。蓄えられた熱は、夕方以降ゆつくりと放熱して建物全体を床から温めます。また、OMソーラーシステムが稼働している間は、常に新鮮な外気を室内に取り込んでいます。暖房しながら換気ができるという点も、冬の働きの大きな特長です。このシステムに特有な構造として、屋根に集熱するためのガルバリウム鋼板とその上に強化ガラス、集熱した空気を床下に送り込むハンドリングボックスと立ち下がりダクト、蓄熱のための断熱コンクリート基礎、基礎に蓄えられた暖かい空気を部屋に送り込む床吹き出し口等があります。断熱効果の高い断熱材の利用で、このシステムの効果がさらに高まります。

このシステム導入においては、NEDO(独立行政法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構)の補助金を申請することができま。システムを導入しなかった場合に比べ、石油やガス等の化石燃料を大幅に減らせることから、補助金対象となっているものです。補助金を受けると、三年間はエネルギー使用量の報告義務があります。

太陽の熱を利用するこのシステム

は、曇天や雨天で太陽の熱が期待できないときは、補助暖房とし

てガス・灯油を使ってお湯を沸かし、熱交換の原理で床下の空気を暖めて部屋に送り込みます。我が家では都市ガスを補助暖房に使っています。

夏になっても、OMソーラーシステムは働きます。昼間、屋根に降り注ぐ太陽熱で高温になった空気は、システムと直結されている貯湯タンクとの連携でお湯取りに回ります。それでも余った熱気は、外に吐き出されます。夜になり、外気温が室内温より低下すると、外の空気を取り込み始め、ダクトを使って床下空間にこの涼しい空気を送り込みます。その状況は各部屋にある床の通風口からひんやりとした風が出てくることで分かります。

太陽光の利用

太陽の光を利用しての明かりがあります。一つはソーラーLEDライトというもので、日中に五時間日が当たれば夜に十時間点灯します。配線もいらず、十年間は持つとのこと。防犯にも役立ちますので、庭に立てています。もう一つは、ソーラーLEDボックスで、やはり昼間の太陽光でエネルギーを充電し、暗くなると点灯する自然エネルギー利用の明かりです。玄関に至るアプローチに採用しました。取り付けて間もない夕暮れ時、郵便配達の方がこれを見てちょっとびっくりされています。足元をほんのりと照らすライトを見て、階段の昇り降りに安心だと言葉がありました。

太陽光発電システムも採用しています。しかし家全体で利用する

ような大型ではなくて、先に述べたOMソーラーシステムが商用電源が切れたときでも稼働するように、必要最低限の五十五W出力の発電パネル三枚が屋根に搭載されています。

雨水の利用

玄関脇に雨水タンクを設置し、雨水を再利用しています。このタンクは二五〇L仕様で、福岡市の「雨水貯留タンク助成金交付」を受けました。我が家の玄関回りの草花による飾り付けにこのタンクの水が大活躍しています。タンクの色も自然色のグリーンで、自然との共生、自然エネルギーの活用にあふわしいものです。

生ゴミの再利用

生ごみ処理についてです。家庭から生ごみを出さずに循環させるコンポストに取組んでいます。福岡市でも「段ボール箱を使った生ゴミ堆肥化講習会」を定期的に実施していますので、この講習会で生ゴミから堆肥を作る方法を学びました。ゴミを出さずにかつ草花の育成にも役立てる一石二鳥を目指しています。

今回は、自然エネルギーの活用について述べました。次回は、自然素材について記述します。

同窓会だより

卒業50周年記念

同窓会報告

(<http://homepage2.nifty.com/kin/slabb/siteDD/>)

電気工学科電子工学科昭和33年



卒業者による卒業50周年記念同窓会が平成20年9月24日(25日)にわたり実施された。今年50周年の節目の年に当たるとして、「琵琶湖周航歌」をテーマとした小さなバス旅行を計画し、近江八幡、水郷めぐり、長命寺、比叡山、母校校内見学と、天候にも恵まれ、23名の参加を得て、楽しい旅と懐かしい交歓の時を持つことが出来た。

集合は近江八幡駅で、水郷めぐり発祥の地である豊年橋を出発し、手こぎ和船に分乗し、琵琶湖畔に密生するヨシやガマの間を縫って、約一時間半の船旅を楽しんだ。

午後からは、周航の歌にある第31番の札所、長命寺を参拝した。八百段の石段は、そろそろ後期高齢者にさしかかる年齢の我々にはきびしいので、タクシーに乗り

合わせてのバイパス。健康長寿の霊場として霊験あらたかな本堂、鐘堂などを参詣し、そこから比叡山に向かう。軽快なドライブウェイにより、仰木、横川から延暦寺に到り、山頂からは秋の澄んだ光に輝く大津・膳所と琵琶湖の雄大な風景を展望した後、山中越え道を下って京都に入った。

宿舎となった「くに荘」は、鴨川のほとり旧久邇宮邸跡地に建てられた保養所で、静かなたたずまいを見せている。到着後は、全員による記念撮影のあと会席膳による開宴となり、やむなく欠席した会員の日本酒の差し入れもあって賑やかな乾杯で50年に及ぶお互いの健康をたたえ合った。

翌日はオブションコースとして大学校内訪問ツアーが組まれ、最近開館した京都大学総合博物館、時計台基礎部分の耐震構造などを見学した。

総合博物館は平成13年に構内にて一般公開を開始した日本初のユニバーシティミュージアムで、二百六十万個の学術標本資料を収蔵している。因みに70歳以上は入場無料である。

また基礎耐震構造は、最新の免震装置と最上階にある建築時からのドイツ製大時計駆動機構、2階の迎賓質などを見学し、「地震に強い時計台」を印象づけていた。1階にはしゃれたレストラン「ラ・トゥール」があり、ここで昼食をとって散会した。

我々も古希を過ぎ、健康状態も流動的で次回開催も危ぶまれる声のあった中で、大きな収穫は、次回の再会を約し、全員が意気軒昂

と別れたことであった。
加藤 隆二(昭33年卒) 記

**昭和38年卒業
45周年同窓会**

平成20年10月6日(月)、さわやかな秋の一日、同窓生36名と同伴夫人1名が京都の地に集まり、昭和38(修士40)年卒の同窓会を開催しました。

集合場所京都駅には予定より早く全員が揃い、貸切りバスにて京大桂キャンパスへ早めの出発です。



洛友会を担当してくださっている大澤靖治教授から京都の街を一望できる桂ラウンジで全体の説明を受けました。桂キャンパスは大

学院として使われており、電気電子は4回生になって研究室配属後、吉田キャンパスから移り研究しているとのこと。

その後3班に分かれ、雨宮研(超伝導)、橘研(プラズマ物性)、大澤研(電力システム)の設備を、新進気鋭の若い先生方の説明で見学することができました。45年前を思い出しながら最新の研究の一端を知ることができ有意義なひと時を持つことができたと感じしております。



記念撮影の後3時に桂キャンパスを発ち、金閣寺(鹿苑寺)、龍安寺を巡るツアーに移りました。在学中以来という人も多く、世界

遺産に選ばれ当時とはやや雰囲気が変わった両寺を觀賞できたのではないかと思います。

5時半に懇親会場の京都国際ホテルに到着し、記念撮影のあと懇親会に入りました。最初に、前回の同窓会以後計報に接した4人を含め今までに亡くなられた6人の同窓生へ黙祷を捧げました。

乾杯に続き、スピーチが始まりました。全員にいきわたるようにひとり3分の制限合図の鈴が用意されましたが、皆さん簡潔にして内容の濃い話をされ、和気藹々の交流の時間を持つことができました。

スピーチの中休みに次期幹事4名が選出され、次回は2年後の2010年に関東地域にて開催することに決まりました。さらにご夫人の同伴参加を積極的に行うことを申し合わせました。次回は華やかになることを期待しましょう。

最後は恒例のびわこ周航の歌と逍遙の歌の斉唱です。青春時代に戻り、心がひとつになったてきばえではなかったかと思っております。

和田 治(昭38年卒) 記

本部だより

**京都大学工学部同窓会の
発足**

京都大学全学同窓会は平成18年11月に発足した。一方、工学部では過去の、学科を単位とした10の同窓会組織がありそれぞれ独立に

活動している。工学部としては全学の同窓会を意識しながら、工学部の各学科の同窓会が協力しあうことでお互いの活動を活性化させ、かつ大学全体の同窓会活動の支援にも役立てようという目的をもった工学部同窓会を発足させる準備が進められてきた。昨年5月26日に学科単位の同窓会からの代表を評議員、役員とする評議員会、役員会が開催され、工学部同窓会が正式に発足した。これまでの経緯と今後の活動方針について概略報告する。

評議員は各学科同窓会から各2名計20名で、洛友会からは石川順三教授、佐藤亨教授が就任した。また役員は会長1名、副会長8名、運営委員8名、幹事2名の構成で、会長には京機(機械系同窓会)の元会長で、住友重機相談役の小澤三敏氏が選ばれた。副会長は6名で、洛友会からは木村磐根が、運営委員は8名で、洛友会からは石川順三教授が選ばれた。

この組織は若干屋上屋を重ねる観もあるが、工学部の中の10の同窓会はそれぞれ固有の歴史を持ち、活動の仕方もかなり異なっている。現状をお互いに披瀝しあうだけでもお互いに大変参考になることが多い。特に京機会では学生会員の活動が活発で、同窓会がこれを積極的に支援している。洛友会としても大いに参考にさせていただきます。

工学部同窓会の今後の具体的な活動としては、学科の同窓会事業をできるだけ共催することにより大学の施設などの使用を優先化でき、費用も節約できることを活

用する。吉田地区に工学部同窓会室を設置し、同窓会と社会の連携活動に活用する。10月3日時点では8号館内の学部長室の隣に「社会連携推進室」の名称で同窓会室が設置されている。

また工学部同窓会独自のクレジットカードを発行し、広く多数の会員によるカード使用金額に応じたキックバックにより工学部同窓会の活動費用をまかなうことも考えられている(なおこの件ではカード会社との交渉が進行中である)。また、事業検討会では、工学部内ですでに始まっているグローバルリーダーシップ教育における産業界との橋渡しとして、幅広い人材を擁する工学部同窓会の協力が得られないかという希望もだされ(8月8日)、具体的に産業界からの出席を求めて特別の検討会も開催された(10月3日)。洛友会からは市原達朗副会長にご出席いただき、貴重なご意見をいただいた。以上がこれまでの経過である。

木村 磐根
(昭30年卒、本部幹事長) 記

支部だより

第90回関西支部ゴルフ競技会報告

第90回関西支部ゴルフ競技会が平成20年10月18日(土)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日は晴天に恵まれ、アウトは福川氏(昭和30年卒)、インは細田氏

(昭和36年卒)の始球式でプレイを開始し、合計24名(内、シニア9名)が競技に汗を流されました。



結果は次の通りです。

- (シニアの部)
優勝 福川 幸男 (S30年卒)
2位 西村 登努志 (S38年卒)
3位 細田 純一郎 (S36年卒)
(一般の部)
優勝 島岡 正憲 (S52年卒)
2位 森下 誠 (S42年卒)
3位 大澤 靖治 (S44年卒)

△第91回競技会のご案内▽

平成21年5月16日(土)
於 武庫ノ台ゴルフコース
若い方も含めて多数のご参加をお待ちしております。

△連絡先▽

関西電力
三浦 良隆 (S55年卒)
江木 利昭 (H13年卒)
050・7104・0941
egitoshiki@akkepc.co.jp

cue No.20 発行のお知らせ

cue(電気関係教室技術情報誌) No.20が発行されました。目次は以下の通りです。内容は、HPにも掲載されていますのでこちらをご覧下さい。
<http://www.kuec.kyoto-u.ac.jp/cue/>

巻頭言

「デジタルとゆとり」

矢島 脩三

大学の研究・動向

「電力変換技術による工学・物理システムの制御を目指して」

産業界の技術動向

「ハイブリッド車の現状と今後」

研究室紹介

平成19年度修士論文テーマ紹介

「電子材料開発における性能と環境の調和」

学生の声

教室通信

賛助会員の声

NTTコミュニケーションズ株式会社

金沢 敬治

ROOM株式会社

三浦 峰生

訃報

| | | |
|-----|-------------------------|---------|
| 昭11 | 古池 弘正 | 20・7・7 |
| 昭26 | 村上 昭一 | 20・9・28 |
| 昭28 | 芝山 龍一 | 20・1・10 |
| 昭29 | 岸本 克知 | 20・5・13 |
| 昭31 | 川崎 洋 | 20・9・12 |
| 昭38 | Prayuth Chivapraphanant | |
| 昭42 | 林 靖人 | 20・5・21 |
| 昭58 | 松本 浩章 | 20・9・23 |

以上の方々をご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

新年明けましておめでとうございませう。会員の皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。昨年4月に始まりました学生会員制度ですが、本号の報告にもありますように夏休みの課外活動(ロボット製作とコンテスト)の表彰の副賞を提供したり、2月に開催される電気電子工学科交流会(学生(主として研究室配属を控えた学部3年生)と教員との交流と懇親を目的とした会)に援助したりと、佐藤幹事(学科長)のご尽力もあって徐々に実質化されつつあります。今後とも会員各位のご理解、ご協力をよろしくお願ひ申し上げます。